# 2棟併存時の姿探る

## パネル討論要旨 V

本堂　寿一氏

今回発掘調査された原添下区域は、鳥海柵の中心的な居住区。入り口は、東北自動車道の建設に伴い発掘をした時に塀の跡が見つかっていることから、必ずそちら側に入り口があるはず。そこから東の方へ中心となる道があり、その南東端の一番守りの堅いところに造られたのが、今回の中心的な建物だろう。

また、北側の沢を挟んだ縦街道南区域から、大きな建物が見つかっている。これは沢にも堀にも囲まれていない。なぜ、あんなところに大きな建物が建てられたか。私は最初から不思議だった。

近くには、金ケ崎を代表する縦街道古墳群がある。安倍氏は金ケ崎の出身だと考えており、墓地の側に大きな建物を造ったと考える。古墳群は祖先の墓であり、一族が固まるために大きな建物が必要だった。

では、どんな建物だったのか。縦街道南から見つかった建物は約61坪。縦街道古墳群のすぐそばであり、今でも寺ではないかという考えを捨てることができない。

SB02という小さな建物がそばにあるが、中門造りというのが鎌倉時代の侍の家の造りにある。ここに宿営の番人が泊まっていたり、入り口になったりする。この場合は、もしくっつければ曲がり家になる。

雪が多く、屋根を守るために大事になるのは屋根の勾配。茅葺きで大体1尺勾配(45度)に近い勾配をとる。それが神社などのこけら葺になると、大体6寸勾配(30度)になる。よっぽど厚く木の皮を葺いて守らないと、すぐに雨漏りしてしまう。一番の問題は軒先で、長くすると雪で折れてしまう。

今回の原添下区域の建物は、二つの建物（SB01・SB02）が同時併存だとすると、近すぎて軒がくっついてしまう。となると、雪を全部乗っけておくことになり不可能だ。

時間差があると考えるなら、母屋(南側の建物)の方が先ではないか。東西に長い北側の建物は、長屋門風の横長の建物で、門も兼ねている可能性がある。

南側の建物は、縦街道南の建物と比べれば、屋根をかけるのは不可能ではない。不可能ではないが、なぜ母屋を2間×5間で造ったのか。私の想像だが、こういう建物を建てたが途中でやめたのではないか。

廂(ひさし)の柱を立てたが、後で塀に使った可能性もある。母屋と塀の間に礎石を置いて廂をつけたのではないか。そうすれば南北の建物の間が空くことになる。同時存在とするならば、そういう考え方もあるのではないか。建物に時間差があるとすれば、どちらが先かということになるが、SB01とSB02を母屋と門の関係で考えていったらいいのではないかと考えている。

（つづく）

原添下区域南東部の建物跡

専門家が各専門分野から持論を展開した鳥海柵跡シンポジウム

金ケ崎の国指定史跡 鳥海柵跡 13

考察 全盛期の中心的建物

2017年度 シンポジウムより

### 登壇者

コーディネーター

佐川正敏氏　（東北学院大学教授）

パネリスト

千田嘉博氏　（奈良大学教授）

本堂寿一氏　（国史跡鳥海柵跡整備委員会委員長）

大平　聡氏　（宮城学院女子大学教授）

相原康二氏　（えさし郷土文化館長）

高橋　学氏　（秋田県埋蔵文化財センター副所長）

箱崎和久氏

（奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室長）